

小田原史談

第78号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

曾我と澄禪上人

穂坂行雄

去る二月五日、水雨降り
その中、曾我谷津法輪寺
(住職本場大龍II澄禪上人
遺跡保存会長)にて澄禪上
人追悼法要が盛大に営まれ
また同上人作「遇迷発心」
和讃がゆかりの婦人たちに
よって奉詠された。
澄禪上人は八澄禪和尚行
状記三巻Vによってその足
跡を知ることができ、行状
記三巻は箱根塔の峯阿弥陀
寺に現存している。

上人と相原曾右エ門

(文中受伝)

曾我原の相原曾右エ門(相原光之亟祖)の家では多くの子が若死をし、大變苦しんでいた。折しも五才になる伴の文治が十死一生の病にかかり夫婦をはじめ一族が一心に看病にあたっていた。或る日、大變貧しそ

うな僧が曾右エ門宅をおとずれた。不思議に思つて、曾右エ門がたずねると八実(昨日文治が塔之峯の窟にきていうには「わたしは曾我原の曾右エ門の伴でございませう。父は生来放逸な性ではないと思ひます。どうかわたしの家においで下さつて、父に菩提心を起すようお勧め下さい」と深くたのむので来たのです。すると文治はたちまち病床より這い出て「上人よくこそおいで下さいました」とふし

地で驚歎した。上人が仰せられるには「そのように驚歎しなくてもよいのだ。人間の死はどうしてもまぬかれないことなのです。文治はこのように立派に往生を乞はれたのだ。これを機会に菩提心を起し、夫婦とも一向に念仏しなさい。文治は薬師如来の浄土に往生したのです」と念仏をすすめられた。

かて曾右エ門夫婦は四十才前にもかかわらず剃髪し、衣を身につけ、念仏の行者となった。曾右エ門は心啓受伝、妻は頓悟妙門と法名をいいただき、終に目出度く往生をとげたという。上人はまた元禄三年の春

受伝の至誠あふれる要請をいられ、受伝の屋敷内に庵を結んだ。庵跡は判然とし

ないが、相原氏の銘ある野面石の墓石が同氏屋敷付近の竹藪から見出され庵はこの辺?かと思われる。元禄五年五月半ば頃上人は受伝の庵で「遇迷発心」和讃をおつくりになった。谷田(やんだ)の窟

通称澄禪窟といわれ、行状記によれば、元禄二年七月五日より翌元禄三年四月末まで約十ヶ月使われたようである。窟窟における上人の徳行が目を追つて四方に知れわたり、多くの人々があちこちから来訪するようになり窟の前は盛んな市ようであった。このため上人は、「自らの修業に支障をきたすのでどこかへ立ち退き度い」と曾右エ門に申されたので曾右エ門は柴垣を結びおまもり申し上げた程である。

元禄二年谷田の山主佐宗三郎兵エの病が重かつたので、上人は彼の恩を謝し、日々夜々通つてねんごろに念仏をすすめられた。最早臨終も近かと思われるころ、病人の痰がつかえ、鼻ヤ口より流れ、苦しんでいたのを、上人は口で吸い捨てるのとたちまち病苦がやみ身も心も快楽となり、禅定に在るように称名を唱え

ながら息をひきとつた。窟の手前には上人の墓碑が建てられている。上人と曾我谷津法輪寺同寺には二十五條布袈裟一領と宝篋印塔が寺宝として安置されている。二十五條袈裟は一針一拝の袈裟ともいわれ、上人或時一針に念仏一遍ずつ唱えて二十五條の布袈裟を手づから縫いこまれた。宝篋印塔は当時の住職香山和尚と杉崎清内が相談して後世のために銘刻したものである。その銘は表は「宝篋印塔」とあり、裏には「澄禪上人曰、若欲見我拜此塔」の十三字が彫り込まれている。

上人と杉崎清内清内(高田村に生まれる法名は覚養一法上座)の父は日頃上人に厚く帰依していた。清内は幼少の時から父仁兵エにつれられて曾我の上人の庵をおとずれていたが、お会いすること念仏のことは一つも申されずただ両親に孝をつくすことのみ仰せられた。

上人が曾我を去つて近江の日野平子山におられた時元禄十六年三月下旬、はるばる清内は澄禪上人をおたずねし、法話を拝聴し、夕陽に及んで十念を授けられ帰った。

上人と中村佐五兵曾我原の庄屋中村佐五兵エ(中村祐忠祖)という者は天性素直な善人であった厚く上人に帰依し、召使が多くなりにもかわらず上人へのささげ物は自分で背負つて谷田の窟へ登り供養していた。このように、澄禪上人は人徳ある僧で、曾我の里人にあまねく慕われたのであった。

上人は、慶安四年(一六五一)江州日野河原村に生まれ、享保六年(一七二一)京、大原古知庵にて入寂す。曾我に初めて入つたのは元禄元年(一六八八)二月一日、上人三十七才のときであった。

この稿をまとめるにあたり、佐宗米男氏(谷田の山主佐宗三郎兵エ後裔)相原光之亟氏、本場上人並びに江州西光寺柴田上人らの先学による御教示に負うところが多大である。記して深甚なる謝意を表する。

民話伝承について

ご投稿をお願いします

お問い合わせ

お多賀さん

鈴木 平八

日本建国についての話しは、とうに皆さん御存知の通りでありまして、それは昔しの国定教科書等に依り聞き覚えていた事と思えます。長ずるが及んでそれが神話であった事が悟られた事でありましょう。

其の建国の神話も信ずるか、否か、その人々の考えによつて異なる事も当然であります。私とはかく貴国へ行つた。そして夫のイザナギは妻を黄泉国へ追いかけて行つたが、ついに連れ戻す事もできず、夫婦は最終的には離別してしまひ、黄泉国からの帰りに笠紫の日向の橋の小門の阿岐原で誤をして、其の時にいわゆる三貴子のアマテラス大御神、ツキヨミの命、スサノノ命の三柱が生れた」と云う、アマテラス大御神がお生れになる様が話してかれております。即ちそのアマテラス大御神は現在で、伊勢皇大神宮として、皇室を始め全国民から崇拜されて来て居ります。

が生みの親である、イザナギ・イザナミの二神はどいうでありましようか、やは現代でも伊勢までには榮えていないようであるが、「多賀大社」として大勢の参詣者を集めていたのです。余りの自分の不勉強を恥じました。

それにしてもアマテラス大御神、を生んだ御両親の質素なる事、であります。既に度々参拝された方々もある事と思ひますが、未だ私同様「多賀大社」を御存知ない方もあるかと思ひますので、通称はその多賀大社も「お多賀さん」としてしく呼ばれて滋賀県多賀町に在ります。実に立派なる社で四辺の森も広く深く境内も静かで、その澄んだ空気が清浄そのもの、心も洗われて参ります。「お伊勢参らば、お多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子で御座る」の俚語の一節もそれを示しております。

国内到る処の多賀社の総本社でもあります。多賀大社

社務所に依れば、全国数十万の崇敬者は口々に「伊勢へ七度、熊野へ三度、お多賀さまへは月参り」と唱へて参拝者は絶ゆる間もない、とあります。

私も安心致しました、イザナギ・イザナミの二神は今尚「お多賀さん」として親しまれて、生き続けているわけです。

附近には史跡めぐりの通地も沢山あります。即ち湖東三山「西明寺」「金剛輪寺」「百濟寺」等、この他安土城跡、全く小田原城など比較にならない、彦根城、長浜城跡等々びわ湖の大海を眺めながらの旅もすばらしい事です。

あの箱根連山を背景に刃か彼方に聳ゆる霊峰富士の眺め、夕日が西山に沈む頃一段と美しい花を咲かせてくれるのだ。

其の時右手のすそには獄の越(猪鼻獄)が七分三分にデンとおさまる眺の美事さには正に一幅の芸術画を見るが如し、世の人々よ、来り称へよと詩人は書くに違いない。

又コン／＼と湧き出づる冷水こそ天与の恩恵と言はなければならぬ、蕪村はこう言い現はした

「わがやどに 清き水かな」

これは昭和二年四月一日のこと小田急線に栢山駅が新設された落成式の当日誰やらの寄贈によつて会場に貼られた一枚の祝詞であつた。

この様にして我が故郷にクローズアップされたのである。

左に県の調査報告を掲げて見よう。

- 一、カルシューム 四三・二三
- 二、ケイ酸 三四・六〇
- 三、アルカリ度 三〇・七二
- 四、マグネシウム 一七・一六
- 五、イオン 八・〇〇

六、硫酸 五・七八
七、酸素 〇・五四
と言う事になります。

飲んでおいしい水、飲んで薬になる水
地区に数多くの長寿者が生存しておられるのをみる
と不老不死の地としてウベなるかなである。

処で農聖二宮金次郎はこの香り高い豊かな天恵の地に生れたのだ。

即ち大自然の前に人類の試金石として与えられた聖神に外ならない。

我々は尊徳を守護神と啓して子々孫々に至る迄、其の徳を偲びつづつ後につづいて行くではありませぬか
金次郎が十六才頃の夏の或る日、近所の友達と五、六人連れだつて富士登山をした時の話、頂上の井戸、金明水を見て友達二人は言う

「金さん!!こんな高い処で水が出るのは全く不思議じゃないか?」
金次郎曰く

「何も不思議な事はないよ Aちゃんお前の頭の頂べんへ釘を打ち込んでみろ血が湧き出すだろう、それと同じ理屈だよ」

Aさんは判つた様な判らない様な話なので帰宅後、よく物の原理を教へて貰つて初めて納得したと言ひ

我が故郷

井上 英一

あゝなつかしの故郷、そして偉大なる郷土よ、君はこの世に誇り得る三つの美点を持って居るのではないか、正直に言つて見給へ、無口でいては誰も気づかな

【伝説】虎御前

神田 太郎 吉

◎虎御前の生い立ち

民部権少輔基成の乳母の子、宮内判官家長という人平治の乱に与して都に身を置きがたく東国に落ち来り相模の国の住人海老名源三季貞の館に足を留む内何時しか平塚の傾城夜叉王の許に通い一人の女子をもうく年こそ未なれ寅の月寅の日寅の刻に生れければ三虎御前と名付く(未年は安元元年乙未)とか。一般には寅年生れ故虎と名付くとは誤りではないでしょうか。

五才の時父家長病て歿り他に身寄りともなければ、山下長者菊綱貰い受けて養育した。又山下長者年四十九になつても子供のないのを愛い近くの虎が池に祀られてある弁天様に祈願をこめて授けたのが虎御前であると書いたものもある。此虎ヶ池は昔は大きい池であつたが今は跡かたはないそうです。

相模風土記山下村の条に山下長者宅跡西南方にあり四段ばかり今村民の宅地となる。南西北の三方に土手高さ八尺許の跡あり、山下長者の事蹟詳ならず曾我物語に曾我十郎祐成の妾虎女は大磯の長者の女と云う因りて彼の長者の宅跡なりと云う説あれ共信すべからず虎の草庵の跡長者宅跡の傍にあり建久四年五月曾我祐成討れし後大磯の虎尼となり此所に閑居せしと伝ふれ共曾我物語には高麗寺の奥に籠ると云へば其地大に違へり此所も高麗寺山下なる故地名となると云へば曾我物語に云う所も此地なるか今詳にし難し。

文塚、村民宅地にあり塚は崩れて小社建つ玉章明神と唱う。虎女、祐成の贈りし文を磨めし処と云う。又此辺に灰塚の字あり、彼の文を焼きし跡と云う。大磯の長者の女で十七才の虎女を二十才の曾我十郎祐成が年頃思ひ染めてひそかに二年通つたと云う曾我物語の記述がどこまで本当か判らないが。建久四年六月一日丙申曾我十郎祐成妻大磯の遊女(号虎)時彼召出之如口状者無咎之間被遣事とか、同年六月十八日癸丑彼女こゝで故曾我十郎祐成の妾と書かれていたが除髪はしないが

墨染の衣に袈裟をつけて亡き夫の三七日忌辰を迎へ箱根山別当行実坊にて仏事を修し和字誦文を捧げ祐成の形見の駒をひき唱道施物等を直ちに出家を遂げ信濃國善光寺に赴いた。時に十九才なりと。

流布本曾我物語では虎は其後手越の少将を伴い諸國を修行したのであるが十郎との逢ふ瀬を染んだ思ひ出の深い大磯を忘れがたくこの地に帰り高麗寺の山深に尋ね入り忙しい柴の庵に閉籠の一向専修の行に明け暮れして七十の余を越し西に向つて念仏遍唱え終つて眠るが如く往生の姿懐を遂げたと云う。本門寺本では六十四、延台寺の縁起では嘉禄三年二月十三日五十九才で歿したと伝えて嘉禄三年では五十三位ではないでしょうか。

大磯には延台寺の虎子石化粧坂の化粧井戸、虎ヶ池弁天其他数多くの伝説の地がある様です。

◎曾我十郎と虎御前の間に子どもはあつたでしょうか。相模風土記大磯善福寺の条に。当寺の開基は寺伝に伊東祐親の二男祐清の子にして伊東四郎祐光と称し当國平塚を領し花水の辺宿河原に

往す和田合戦及び承久の乱に勲功あり然れ共常に名利を避くる心深く遂に親鸞の従弟となり平塚入道法承と号す後高麗権現の別当に補せられ法名を了源と改むとあり又大谷遺蹟録には了源は曾我十郎の子にして建長三年八十二才にて歿すと。同書三浦郡東浦賀聖寺の寺伝に開基は了源、了源は曾我十郎祐成の子、母は大磯の虎女なり童名祐若後河津三郎信之と称すと何れにしても吾妻鑑の記述と異り祐光の平塚を領せし事所見なしと記してあります。当地旧家の系図には祐成に一子ありと記されてあるそうです。

昭和六年九月四日付東京日日新聞に次の様な記事が載せてありました。

◎大磯の高麗山をめぐる曾我十郎と虎御前の情話と伝説

当高麗山山麓は曾我十郎と虎御前に関する伝説が相当多くこの伝説を具体的に研究しようと思ふ。県から石野教諭が出張され地元大磯町では二宮町長、郷土史研究家又仏像研究家として有名な安田綱彦画伯等数多くの方々数が数日山を掘り堂宇を細かく調査研究を続けられた。同山中の慶覚院

にある千手観音像等も発見され民家からは虎御前より十郎に贈つた玉章、虎御前の先祖の墓碑に関するものも殆んど確定的の品が発見され又山頂からは鎌倉時代の土器に納められた人骨が見付かった。記録に依ると虎御前は妻が死んだならば高麗山の上にて曾我の郷家の見える所に葬つて下さいと云つていたので発掘された地点からははるかに曾我方面が望観され土器に依つても年代が符合する故虎御前の骨ではないかと調査隊は勇躍つぎつぎと調査研究を続けています。

先年夏私共四、五人にて高麗山へ行って見ようと先づ高来神社に参拜、案内なしではどうかと宮司さんの宅を訪れました処あいにく留守、仕方なく一同山へ登りましたがあまり得る所無く下山再び宮司さんの宅を尋ねた。今度は折良く在宅、種々御話しを伺いましたところ大體虎御前のお墓の辺り見当は付いておりますが、五輪塔など沢山ありましたが、何時か心無いもの悪戯か諸々へ投げ散らされ、今は大分荒れ果て、おります。所蔵の虎御前の古い木像其の他のものも拝見させて頂きました。位牌は高麗寺の方に安置してある由。

近い内に有志に計り何とか復興致し度く着々準備を進めております。其の後もう一度訪れて見度く話はしておりますが、残念ながらまだその機は得ません。

大方の御批判御教示を願います。追記 大磯町高麗山麓に長者林と云う処あり虎女の養父山下長者の館は今の渡辺伯壽の別邸のある裏門の辺に当ると記した書もあり

伊豆箱根めぐり 広沢 十五夜
トンネルを出てまともなる富士の嶺は雪かぶりいて裾をのぞかずリフトにくる老若男女の長き列に加りておりあこがれもちて大宝山の西に東に石仏の苦むして湖に浮く遊覧船のゆき交りを楽しみ見おろすもゆられつつ高原にゆらく穂すすき夕陽にかがやく中をゆるゆる歩む

大磯町では二宮町長、郷土史研究家又仏像研究家として有名な安田綱彦画伯等数多くの方々数が数日山を掘り堂宇を細かく調査研究を続けられた。同山中の慶覚院